◇イベント報告◇

IASB・FASB・AAA 共同研究大会参加報告

ASBJ アシスタント・ディレクター　牧野　めぐみ
ASBJ 専門研究員　富田　真史
ASBJ 専門研究員　山本　雅実

1. はじめに

国際会計基準審議会（International Accounting Standards Board: IASB）が米国財務会計基準審議会（Financial Accounting Standards Board: FASB）及び米国会計学会（American Accounting Association: AAA）と共同で開催する研究大会“Accounting for an Ever-Changing World”が、2022 年 11 月 2 日から 11 月 4 日にかけてニューヨークにおいて対面とバーチャルカンファレンスのハイブリッド形式で開催された。これは IASB の年次リサーチフォーラムの一環として開催されており、IASB 及び FASB が、直近の主要な会計基準の適用後レビューのサポートとなるよう研究を奨励することで、学術界と会計基準設定主体との間の対話を促進することを意図して開催されており、収益、リース及び金融商品がテーマとされた。企業会計基準委員会（ASBJ）からは川西委員長、山口常勤委員及び著者が、バーチャルカンファレンスに参加した。

2. 全体のスケジュール

今回の研究大会のスケジュールは、次のとおりであった。

2022 年 11 月 2 日	
1	座談会
2	パネル・ディスカッション （収益）
3	研究論文発表（収益）#1
4	研究論文発表（収益）#2
2022 年 11 月 3 日	
5	研究論文発表（リース）#1
6	パネル・ディスカッション （リース）
7	ゲストスピーカーを招いての昼食会

8	研究論文発表（リース）#2
9	研究論文発表（金融商品）#1
2022 年 11 月 4 日	
10	パネル・ディスカッション （金融商品）
11	研究論文発表（金融商品）#2
	結論

3. 各セッションの概要

(1) 座談会（Fireside Chat）

最初のセッションとして、Andreas Barckow IASB 議長、Mary E. Barth 名誉教授（Stanford Graduate School of Business）、Richard R. Jones FASB 議長の 3 名による座談会が行われた。主に会計基準設定における学術研究の役割や研究成果の有効性、また会計業界における学術研究の重要性について議論が交わされた。

(2) パネル・ディスカッション（収益）

本セッションでは、Stacy Harrington 氏（Microsoft 社）、Stefan Salentin 氏（Ericsson 社）、Alison Spivey 氏（EY）、Todd Castagno 氏（Morgan Stanley 社）がパネリストして参加し、Topic 606「顧客との契約から生じる収益」（以下「Topic 606」という。）及び IFRS 第 15 号「顧客との契約から生じる収益」（以下「IFRS 第 15 号」という。）の導入について、作成者、監査人、財務諸表利用者の立場からの経験が共有された。新基準の導入にあたり議論となった会計上の論点として、本人か代理人かの検討や、顧客に支払われる対価が例として挙げられた。

(3)　研究論文発表（収益）#1

本セッションでは、次の 2 つの研究論文が著者から紹介された後、学術的観点からの評価と会計基準設定の観点からの評価が行われた。会計基準設定の観点からは、IASB の収益プロジェクトのテクニカル・スタッフから IASB が開始している IFRS 第 15 号の適用後レビューへの貢献の観点から評価がされた。

① IFRS 第 15 号の建設業へのインパクト

IFRS 第 15 号の適用が建設業の会計処理に与えたインパクトに関する研究結果が紹介され、住宅開発において収益が一定期間にわたり認識される場合と一時点で認識される場合があることや、不利な契約の会計処理の多様性等が紹介された。

② 本人か代理人かの検討

Topic 606 の本人か代理人かの検討に関する要求事項の適用が、①基準遵守のリスクと監査費用、②収益の質、及び③収益情報によるサプライズ、に与えた影響について研究結果が紹介された。研究による発見事項の 1 つとして、代理人による収益の総額開示等、本人か代理人かに関連する開示の拡充が財務諸表利用者による収益情報の利用方法の改善につながる可能性があることが紹介された。

(4)　研究論文発表（収益）#2

本セッションでは、次の 2 つの論文の紹介が著者から行われた後、学術的観点からの評価と会計基準設定の観点からの評価が行われた。会計基準設定の観点からの評価は、FASB の収益プロジェクトのテクニカル・スタッフにより行われた。

① Topic 606 における収益の分解情報の意思決定への有用性

収益の分解情報の開示により、財務報告の意思決定の有用性が高まったとする研究結果が紹介された。当該開示による有用性は詳細な質的開示を伴う場合にさらに便益が高まる可能性があることが紹介された。

② Topic 606 の遡及適用の影響

Topic 606 の適用時に遡及適用を行った企業では、行っていない企業と比較して、アナリストによる収益予測が正確であり、株価の流動性が高かったとする

研究結果により、会計基準の遡及適用により、財務諸表利用者による企業の評価の正確性が高まる可能性があることが紹介された。この研究の結果が、FASB が将来の会計基準設定において、遡及適用を強制とすることのメリットを評価する手助けになる可能性があることも紹介された。

(5) 研究論文発表（リース）#1

本セッションでは次の 2 つの論文の紹介が著者から行われた後、学術的観点からの評価と会計基準設定の観点からの評価が行われた。会計基準設定の観点からの評価は、Ann Tarca IASB 理事により行われた。

① リース契約の減少と取得取引の拡大－新リース会計基準の効果

Topic 842「リース」（以下「Topic 842」という。）が企業の投資と経営にどのような影響を与えているかについて、航空会社をサンプルに調査・実証分析した結果と考察が紹介された。新リース会計基準の適用により、公開企業である航空会社のオペレーティング・リースの利用が減り、代わりに取得取引が増加していること、またそれに伴い航空機の使用状況にも変化がみられるデータが示されたことが紹介された。

② 新リース新会計基準がもたらす経済的影響

Topic 842 と IFRS 第 16 号「リース」（以下「IFRS 第 16 号」という。）の導入について、19 か国 3,980 社をサンプル対象として実施された分析結果が紹介された。新リース会計基準の導入は比較可能性を高め、情報の非対称性を低減させることで、情報環境を改善していると結論付けたことが紹介された。

(6) パネル・ディスカッション（リース）

本セッションでは、Sue Harding 氏（Harding Analysis 社アナリスト）、Shawn Husband 氏（Walmart 社）、Sandra Melocik（Exxon Mobil 社）、Scott A. Muir 氏（KPMG）がパネリストとして参加し、IFRS 第 16 号及び Topic 842 の導入について、作成者、監査人、財務諸表利用者の立場からの経験が共有された。新リース会計基準の導入時の論点として、リースの範囲の判断やシステム対応の困難さが紹介された。また、セール・アンド・リースバック取引について Topic 842 でルールが明確になったという意見が出された。

(7) ゲストスピーカーを招いての昼食会

ランチセッションとして、SEC 主任会計士代理を務める Paul Munter 氏をゲストスピーカーとして招き、「急速に進化する世界への適応－会計基準設定と規制への影響」をテーマとしたスピーチが行われ、事前に寄せられた質問に対する質疑応答が行われた。

(8)　研究論文発表（リース）#2

本セッションでは次の 2 つの論文の紹介が著者から行われた後、学術的観点からの評価と会計基準設定の観点からの評価が行われた。会計基準設定の観点からの評価は、FASB のテクニカル・スタッフにより行われた。

① 新リース会計基準の報告インセンティブとその結果

企業の資金調達において新リース会計基準がどのような影響を与えているかについての研究結果が紹介された。実証分析の結果、企業が新規のオペレーティング・リース契約の最低リース料の支払い期間を短縮することで、リース負債の額を減らすインセンティブが働いていることが明らかになった点が紹介された。

② Topic 842 における変動リースの特性と結果に関する最初の証拠

Topic 842 において、変動リース料は信頼性を持って見積もることが困難であることからオフバランス処理が認められている点について、実証分析の結果、変動リース料がオペレーティング・リースやファイナンス・リースと同様の特性を有していることを示すとする研究結果が紹介された。この結果から変動リースの例外処理に疑問を投げかける主張が紹介された。

(9)　研究論文発表（金融商品）#1

本セッションでは次の論文の紹介が著者から行われた後、学術的観点からの評価と会計基準設定の観点からの評価が行われた。会計基準設定の観点からの評価は、Zach Gast IASB 理事により行われた。

① 期待損失、想定外のコスト？―IFRS 第 9 号「金融商品」（以下「IFRS 第 9 号」という。）の下での中小企業のクレジットアクセスからの証拠

予想信用損失モデルの導入により、中小企業の銀行与信に及ぼす影響を銀行、借り手及び契約規模でサンプルを用いて分析した結果が紹介された。実証分析の結果、中小企業の与信額と融資期間の減少につながると同時に、これらの企業にとって金利コストと担保の必要性が増加したことが示された。

(10) パネル・ディスカッション（金融商品）

本セッションでは、Chris Ackerlund 氏（Bank of America 社）、Lisa Bomba 氏（Deutsche Bank 社）、Graham Dyer 氏（Grant Thornton）、Osman Sattar 氏（S&P 社）がパネリストして参加し、予想信用損失モデルの導入に伴う、将来予測の不確実性と引当金のボラティリティについて議論された。また、文脈に応じた開示が財務諸表を理解する上で重要であることが確認された。

(11) 研究論文発表（金融商品）#2

本セッションでは次の論文の紹介が著者から行われた後、学術的観点からの評価と会計基準設定の観点からの評価が行われた。会計基準設定の観点からの評価は、FASB のテクニカル・スタッフにより行われた。

① Current Expected Credit Losses (CECL)基準と銀行の情報生成

CECL モデルの導入により、銀行の報告や経営判断にどのような影響を与えたのか、財務報告及び信用リスク管理を用いて分析した結果が紹介された。CECL モデルの適用後、銀行は、地域の経済状況をよりよく反映するようになり、ローンのデフォルトが減少していること、また、将来予測情報の収集と分析を義務付ける会計基準が、銀行の経営判断においてよりよい情報の作成と適用を促す可能性があることが紹介された。

4. おわりに

来年の IASB の年次リサーチフォーラムは、2023 年 11 月にパリで開催される予定である。

以　上